

発達障害児・者を兄弟姉妹に持つ「きょうだい」支援の方向性に関する探索的研究

—成人きょうだいへのインタビューを通して—

An Exploratory Study of Support for Siblings of Children with Developmental Disorders :Interview Analysis on Adult Siblings

長澤 克樹 (Katsuki Nagasawa) 指導：菅野 純

【問題と目的】

発達障害児・者を兄弟姉妹に持つきょうだい(以下、きょうだい)は特有の悩みを持つと言われている(Meyer&Vadasy, 1994)。発達障害児の家族研究では、その支援対象は主に親が中心である(吉川, 2001)。一部地域の親の会などできょうだいのための活動の場を設けているところが増えている(柳澤, 2007)ものの、きょうだい支援の体系は整っているとはいえない。よって本研究では、きょうだいからみた同胞の理解や捉え方の変化プロセスについて探索的に検討し、きょうだい支援の方向性を見出すことを目的とした。

【方 法】

成人きょうだい8名(男性2名, 女性6名, 平均年齢25歳)を対象として、半構造化インタビューを行い、「就学前から現在までの同胞の理解や捉え方」を回想して語っていただいた。インタビューデータから逐語録を作成し、分析データとした。分析は木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いた。

【結果と考察】

分析の結果、38個の概念、22個のサブカテゴリーが生成され、これらを構成する〔ありのままの同胞〕、〔同胞に対する葛藤〕、〔同胞の相対視〕という3個のカテゴリーが生成された。各発達段階におけるきょうだいの同胞への理解と捉え方の変化プロセスを説明する結果図(Fig 1)が作成された。以下、このプロセスを説明していく。なお、文中の〔〕はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、「」は概念を表す。紙面の関係上、〔同胞に対する葛藤〕部分のみの掲載とした。

きょうだいは小学生になると〔同胞に対する葛藤〕の段階に入る。次第に「同胞の行動に対する違和感」を抱くようになり、同胞を他児との比較や自己と同胞との行動上の「違いの気づき」から、明確に〈自己と同胞の違いの認識〉へ至る。〈我慢する〉ことはきょうだいにとって暗黙の了

解であり、発達段階が進んでも消えることはない。さらにこの時期のきょうだいは〈自己と同胞の違いを明確に認識〉しつつ、〈恥ずかしさ〉を抱くようになる。同胞の特異な行動により、「外出時の恥ずかしさ」を覚え、「友達を家に呼ばない」悩みも生じてくる。さらに「友だちに同胞について話すことへのためらい」の気持ちを持つ。小学生高学年から中学生になると、〈同胞の受け入れの努力〉を試みる。同胞の「対応の仕方を学ぶ」ことをする一方で、障害児・者一般をからかうような発言に対して「障害者へのからかいの憤り」を感じ、〈やるせないさ〉を抱く。

中学生から高校生の時期のきょうだいは〔同胞に対する葛藤〕のピークを迎える。「同胞へのアンビバレントな感情」や「同胞を悪く思うことへの自己嫌悪」を感じ、〈自己の揺らぐ感情〉を持つ。また、「同胞の障害を隠すことへの自己嫌悪」や「障害者を悪く言う友人に同調してしまう」ことを経験し、〈同胞のことを話せない嫌悪感〉を抱く。

高校生や大学生になると、きょうだいは〔同胞の相対視〕をする段階となる。きょうだいは「同胞のことが話せる環境」や「同胞のことを話せる友人の存在」などの〈友人に同胞について話せる条件〉が揃うことで、同胞について話しができるようになり、〈解放感〉を得て、気持ちの整理が進んでいく。最終的に、〈同胞を客観的にとらえ〉、きょうだいは「同胞への感謝の気持ち」を感じたり、心理的・物理的に「同胞との距離感がつかめる」ようになる。

【総合考察と今後の課題】

本研究では各発達段階において同胞への理解や捉え方の変化過程が明らかになり、今後のきょうだい支援を展開していくための方向性を具体的に示すことができた。

M-GTAは研究テーマによって限定された範囲内における説明力のすぐれた理論である(木下, 2003)。本研究の結果は、20歳代の女性という範囲において説明力が発揮されると考えられる。今後は本研究で作成された変化プロセスの妥当性を検討していく必要がある。

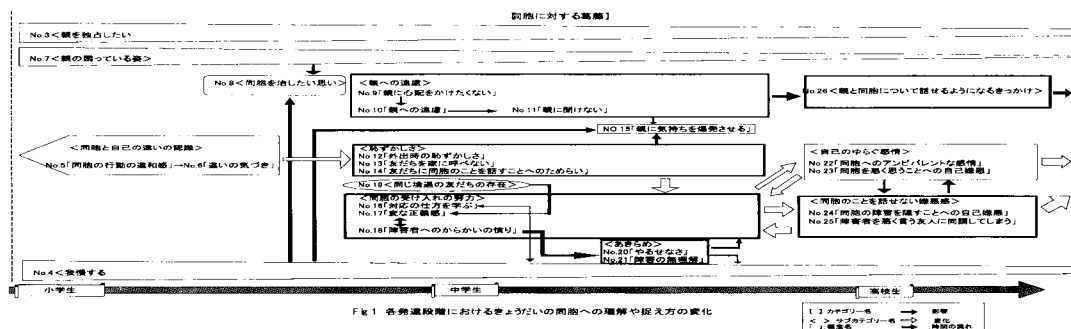


Fig 1 各発達段階におけるきょうだいの同胞への理解や捉え方の変化